



今年もアートカクテルが開催された。三度目である。参加したアーティストは33名、初参加の8人から挙げていく。よこすかよう子、松宮真理子、森彬博、仙仁司、服部純子、加藤慶子、古川巧、武内カズノリ。これまでも参加したアーティストを羅列する。大森梨紗子、中澤小智子、松尾夕姫、イシカワマリコ、望月久也、勝田徳朗、甲斐千香子、鈴木純子、カセイイノウエ、田邊光則、前田精史、小口あや、片岡操、菅沼緑、宇野和幸、中村宏太、石原ケンジ、古賀亜希子、関水由美子、イヴァ・ハラディス、萩谷将司、IZUMI、中村陽子、十河雅典、吉岡まさみ。各人が3点ずつなので、総計99点。壮観であった。

今年のアートカクテルを見た所感を記す。何時ものことだが、アートカクテルはベテランから若手まで揃っている。平面、立体だけの区分ではなく、半平面、半立体の作品もあるので、ある意味、分野は問われていない。ステップスにゆかりのあるアーティストであることは当然であろうが、それだけステップスギャラリーの幅の広さが浮彫となる。吉岡は本気なアーティストであれば、ウエルカムだ。仲間うちで行っているわけでは、決してない。

吉岡は本気で作品を売ろうとしている。吉岡は儲けようとしているわけがない。それは何時ものことだが、今回はギャラリーのスペースと展覧会の性質上、結果的に小品になるので、買い手は尚さら購入しやすくなった。

私は近々引っ越そうと考えている。先日、とある物件を内見した。若手の社員は、玄関でぼーっと待っていて「どうぞ」。質問してもそれ以上の返事がない。移動中も世間話は、なし。そのように指導されているのであろう。

私が社長であったのなら「まずは不動産の誤解を解く為に沢山世間話をし、聞かれた事以上の重要性を力説せよ。不動産がよくなることは、人間の生活の向上に繋がり、果ては、人類全ての人間が幸せになれるように、我々は努力を続けなければならないのだ」と、社員に言うだろう。吉岡もまた、自己の画廊のことだけではなく日本の画廊、美術界の動向、果ては世界の美術界の盛り上げを前提に「作品を売る」ことが重要だと考えているのだと思う。最終日、吉岡は私に話してくれた。「来場者数は二倍だが、売れ行きは1/3。本当に不景気だね」。売れなかったのは残念だが、来場者数が倍増したということは、それだけ吉岡の信念が少しでも世に伝わっている証ではないだろうか。この国では「美術作品を買う」という発想自体が、未だ浸透していないのが現状だ。

私は11:21 - 2018年4月16日に、以下の内容をツイートした。「三浦展『富裕層の財布』(プレジデント社 | 2007年)、10年前で、尚且つ3.11を挟んでいるが、今日とさほど変化はないであろう。富裕層に時間も心のゆとりもなく、只々セキュリティと投資を繰り返しているという結果に唾とした。質素な暮らしをしていて、とても美術品購入など考えられない様子である。投資以外の発想は未だない。宇佐美圭司の東大食の壁画作品が廃棄された事件があり、「東大がどのような見識で」と非難轟々だが、本来ならば宇佐美だけではなく、あらゆる作品が事件になるべきである。宇佐美という高く評価されたアーティストだから起こる議論である。ここには未だ著名アーティスト崇拜が隠されている。我々がすべきことは山積みだ。

